

私の読書歴と職業選択

学生相談員 長尾 洋之

私は大学の秘境ともいえる学生相談室でカウンセラーをしています。突然の原稿依頼に戸惑いながら、過去の読書歴を振り返ってみると、そこに今の職業に続く軌跡を見出しました。

私には、過去、何冊も読んだなかで強烈な印象を受けた本が、小、中、高校、大学と1冊ずつあります。

最初の作品は小5の頃の「家なき娘」です。エクトール・マロー作で1893年に書かれた古典です。両親を亡くし、一人ぼっちになった少女、ペリーヌの物語。ペリーヌが湖畔の狩猟小屋でひとり暮らしをしながら、工夫を重ねて靴や肌着やスプーンを作るくだりにひどく憧れ、自分もこういう生活をしてみたい、と夢みました。

中学時代に衝撃と影響を受けた作品は、『脂肪のかたまり』です。母親の婦人雑誌に載っていた、人間の暗部と醜部をすどく描くモーパッサンの短編小説で、今、読んでもぎくりとする大人向けの内容です。この作品で、人間のエゴイズムや裏の心を知り、大ショックを覚え、複雑な人の心に関心を抱き始めたような記憶が残っています。

高校では、拷問によって殺された小林多喜二の写真集も忘れられないけれど、島崎藤村の『破戒』を必死で読みました。部落出身者の丑松の物語です。社会性のある重たいテーマですが、大学に入ると、毎日、歌を歌っていて、政治にも社会にも無関心な日々を過ごしました。

そんなある雨の日、図書館で出会ったのが『夜と霧』。ユダヤ人強制収容所の極限状況で生きた体験記録です。人の生き方や精神性に関心があった自分は強烈な印象を受け、この本はその後の職業選択に強い影響を及ぼしました。

図書館を活用して 身につけた能力

文学部 舟橋 大輝

図書館の1階の資格試験用図書が並んでいる参考書の棚の大きな机、そこで私は講義で出された宿題を片付ける。レポートを書くために必要な参考書をあの大きな机のそこかしこに並べ、自分の定位置に座り、愛用のシャープペンシルを持ちレポートに取り組む。つまり、その大きな机は私の勉強机なのだ。だが、実のところ私は図書館で勉強することが苦手な方であり、あまり利用することはなかった。それでも図書館で勉強しなければならない大きな理由がある。

私が所属している専攻は課題が多く、図書館にある本を使わなければいけない。また、その課題を終わらせるために必要な情報は、図書館にあり、しかも大概書庫に置いてある古い本や、教授が参考文献として寄贈した本ばかりである。そのため授業がある日だろうがない日だろうが毎日図書館に通っている。

だが、図書館で勉強するようになってから、私は少しずつ変わってきたことがある。まず1つ目は「調べ癖」がついたことである。以前は分からなければそのまま放置していたが、図書館で課題をするようになってから、ちょっとでも分からない箇所があれば、図書館にある本を使って調べたりするようになった。もう1つは「集中力」がついたことである。まったく集中力がなかった私であったが、図書館を活用するようになってから、周りで勉強している人がたくさんいるため、自然と集中して勉強をするようになった。

集中力がついて、周りに友人がいると、今でもついつい話してしまうが以前よりは減少し、なにより勉強することが習慣化され資格試験やTOEICの勉強もするようになった。その結果TOEICでは受験するごとに点数が上がっていている。今では図書館で勉強することは日課にまでなった。これから私は教員採用試験や資格試験が控えているため、勉強することがたくさんあるが、今後も図書館で勉強し、将来の夢をつかもうと思っている。